

シリーズ・編集部座談会《こんな話&あんな話》

新型コロナの感染拡大が続くなか、平常心を保って生きるには!?
どんなときにも我々には「明日への糧になる言葉」たちがある①

【出席者=本紙編集部一同】

☆明日への準備を常にすることが「心のワクチン」

司会者 新型コロナの感染拡大はいよいよ本格化しつつあって、各方面に影響が出始めているね。ネットなんかをみても、新型コロナに関するニュースや投稿だらけだけど、中身のあるものは少ない。

信頼できるワクチンの開発もまだだし、いろいろな思惑が邪魔しあうのか、国の方針もころころ変わる。そうこうするうちに感染者や重症者の数はうなぎ登りを続けている。そんな状況下に、中身のあるニュースや投稿をしるというのも、土台無理な話ではあるんだけどね（笑）。

記者B 国も東京都もなんだか浮き足立っている感じがです。国民や都民に対して明確な針路を示すような言葉は皆無とっていいですね。

記者C 新型コロナの先行きがまったくわからない以上、だれも自信を持って何かをいうということができない。そういうことなのではないでしょうか？

記者D そうかもしれませんね。それだけに本紙正月号の表4に特別掲載した企画記事の文言、「たとえ世界が明日終わるかもしれないとしても、私は今日、リンゴの木を植える」というような、地に足の着いた言葉を目にすると、なんだかホッとします。

記者A 本当にそうだね。新型コロナに関する記事やニュースをみていると、我々はいま、なんでもないことに一喜一憂してしまいすぎるところがあって、まさに「地に足が着いていない」感じがする。これはかなりのストレスだね。

でも、経営者のみなさんのなかには、こういうときにこそ将来への布石を打っておこうとする方たちも必ずいるはずだ。なかなか外には聞こえてこないけど。だから今月の座談会はそういう言葉、危機に際してなおかつ自分を見失わずに前進していく助け（糧）にな

るような言葉を集めてみたら、どうでしょうか？

司会者 それはいいね！ A記者はそういう言葉、何か知っている？

記者A 危機に際してバタバタ慌てるのは賢くないというような意味の言葉では、アルバート・シュバイツァーという神学者がいったとされる、こんな言葉があります。

「どこにいても緑色の交通信号ばかりを見ている人は楽観主義者であり、赤の停止信号ばかりを見ている人は悲観主義者。本当に賢い人は色盲だ」

色盲という言葉はもはや死語だし、場合によっては差別用語になってしまうかもしれませんが、要は刻々と変わる不安定な情勢（色）ばかりをみて一喜一憂するのは賢くない。本質を見抜くには、あふれるような世間の情報にある程度鈍感でいたほうがいい、ということなのかもしれません。

司会者 なるほどね。ここに「名言集」が何冊かあるから、みんなで気に入った言葉を抜いていこうか。

記者D 分かりました。あ、これはいいな。たとえばこんな言葉はどうでしょう。

「困難あり、便法あり、希望あり」

あの毛沢東の言葉だそうですが、どんな困難にも回避する方法や解決策はあるし、その先には希望がある、というようなことだと思います。

記者B そういうのもいいね。これはどうだろうか。

「わたしは決して障害に屈しない。いかなる障害も、わたしのなかに強い決意を生み出すまでだ」

これはレオナルド・ダビンチの言葉だそうです。困難が目の前に立ちはだかれば立ちはだかるほど、前に進もうとする決意が強まると。

司会者 実際、新型コロナによる制約を活用して、新たな事業を立ち上げる人もいるからな。